

日本の腫瘍の疫学

青山英康

(岡山大学医学部衛生学)

疫学—Epidemiology とは「人間集団の健康と疾病にかかわる諸要因と諸条件の相互関係を分布と頻度とによって明らかにする医学的方法論」と定義されている。かつては、国民の健康の最大の脅威であった「伝染病」の感染源や感染経路、そして宿主側の感受性を確定する方策として活用されてきたし、Robert Koch のコレラ菌の発見に先行して、John Snow がコレラの集団発生の拡大を阻止するための実践の方策を疫学調査によって示した話はいまにも有名である。

結核が「亡国病」とか「国民病」と呼ばれていた時代から成人病が死因の上位を占める成人病時代を迎え、今日では生活習慣病と呼ばれる状況となり、疫学研究の対象は拡大し「健康の疫学」と呼ばれる分野も確立されている。

成人病と呼ばれる「がん」と「脳卒中」および「心臓病」などの慢性退行性疾患についての疫学調査の成果は、成人病対策に重大な示唆を数多く提供してきた。わが国における「がん」の罹患および死亡の状況は、古くは国際的な比較において「胃がん」や「子宮がん」が多く、「肺がん」や「乳がん」、そして「大腸がん」は少ない特徴を示していた。今日では「胃がん」や「子宮がん」が減少し、「肺がん」や「乳がん」、そして「大腸がん」が増加し、がんの罹患や死亡の状況が欧米風に変化してきた。この

ことにヒントを得て、生活習慣病としての対策を検討することになった。

疫学調査の成果として、これまで数多くの「所見」が見出されてきたとはいえ、これらを実践的な対策に活用するためには、疫学的所見の正確な理解が基本となる。たとえば「ある疾患が最近増加している」といった場合に、「発病原因が増加して、患者が増加している」のか「診断技術の開発によって、発見される患者が増加した」、あるいは「治療法の開発が遅れているために、発見された患者がたまってきた」のかが特定されない限り、対策の成果は期待できない。

疫学調査にとって重要なのは「人間生態学的視点—Humanecology」であり、同時に臨床医学の分野では馴染みの薄い「症例・対照研究」における「対照群」の設定である。さらに、対象抽出や情報収集、干渉などにおいて、常に「倫理」や「バイアス」に対する慎重な配慮が必要となる。

◎参考文献

- 1) 青山英康編著：今日の疫学，医学書院，1996。
- 2) 久繁哲徳：最新・医療経済学入門—医療システムの抜本的改革に向けて—，医学通信社，1997。
- 3) Geoffrey Rose 著，曾田研二，田中平三監訳，水嶋春朔，中山健夫，土田賢一，伊藤和江訳：予防医学のストラテジー，医学書院，1998。